筑波大学リハビリテーション研究,5(1),72,1996.

〔ライブラリー〕

障害児教育の研究法

D.M.マーテンズ、J.A.マクローリン共著
中野善達、佐藤至英編訳
山中ともえ、田中容子、坂口しおり、松藤みどり、
原　由紀、新宮絹子共訳
田研出版株式会社、1995年

この本は、"Donna, M. Mertens and John A. McLaughlin, Research metheds in Special Education. Sage Publications, 1995."の全訳である。題名や目次から直感的に受ける印象では、今日はやりの、調査研究のためのハウツー的な内容であるかともとれる。しかし実際の内容は、調査・研究という観点から、障害児教育・心理学をとらえなおしたものといえる。調査研究を自ら実施する者が、実施上の様々な注意点を学習するための参考書として、利用価値が非常に高いというだけではなく、障害児の教育や福祉に携わる者が障害児の一つの見方を学ぶ上でも、大変参考となる内容を含んでいる。また、障害児に関する種々の資料を利用する者にとっても、資料を通して障害児を適切に理解するために必要な情報が含まれている。さらに、障害児に対する配慮では先進国であるアメリカ合衆国の情報も提供されており、今後の日本での状況を予測させるような資料も盛り込まれている。

具体的な内容は、目次に示したように、調査研究に関わるかなり広い範囲をおさえている。書店の本棚には、統計法に関する、解説や演習を扱った本が所狭しとあふれているが、障害児の教育や心理の研究にまとを絞ったものはほとんど見られない。障害児の調査研究には、一般的な方法に加え、配慮しなければならないことが多くある。それらをきちんととらえず、一般的な方法を機械的に適用しただけでは、障害児の適切な把握は難しい。コンピュータ技術の進歩によって、複雑な統計処理も簡単にできる時代になっている。だからこそ、コンピュータにかける前のデータの質が問われるのである。きちんとしたデータの収集や整理ができていなければ、それに基づく分析は意味を持たなくなってしまう。このような事柄は今日まで、大学の専門課程の講義の中で、教官の体験を通した情報としてしか得られなかった。この本では、障害児を対象とするときの細かい配慮が、研究目的の設定から、資料の解釈に至るまでの様々な段階にわたって述べられている。さらに、各章あるいは節ごとに、そこで説明された研究や方法に対して、多面的に考察するための質問が用意され、課題をたえず批判的にとらえるような心構えが示されている。

この本には、個々の調査分析方法に関する具体的な細かい説明は含まれていない。具体的な手法については、別に参考書を求め学習する必要がある。しかし、本書としては、それがないために、かえってこの本の目的である、障害児教育の研究に対する考え方が明確化されているといえる。障害児教育の研究について考えさせられる本である。

なお、本書の訳出には、中野善達筑波大学教授をはじめ、社会人を対象とする夜間大学院修士課程リハビリテーションコースの教官と、その修了生の方々があたられており、仕事を続けながらの厳しい環境で勉学を進められた方々のチームワークの良さが感じられる。

目次と内容の概要

第1章　本書の目的と性格：障害児教育研究の必要性、研究に影響する要因等を解説
第2章　文献のレビュー：文献レビューの目的、研究課題、情報源、集積等を解説
第3章　数量化研究法：実験的方法、妥当性、因果関係、単一事例研究、調査研究等を解説
第4章　特性把握的研究の方法：特性把握研究の重要性、研究のタイプ、データ収集法を解説
第5章　被験者の認定と選定：定義、教育的対策、標本抽出問題、倫理・守秘義務等を解説
第6章　情報の収集：目的、情報の出所、収集手段の技術的適合性、測定用具等を解説
第7章　データ分析・解釈・報告：数量的データ分析、分析と解釈の問題、研究の報告等を解説
第8章　障害児教育における今後の方向性

（筑波大学心身障害学系　四日市　章）